

博士論文要旨

論文題名：小学校高学年におけるボール運動系領域(ゴール型)の技能の指導内容に関する研究：教師に対する調査及び児童に対する調査を通して

立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科
スポーツ健康科学専攻博士課程後期課程

フカダ ナオヒロ
深田 直宏

2008年以降に改訂された小学校、中学校及び高等学校学習指導要領では、指導内容の明確化及び体系化が図られた。中でも、ボール運動系領域は、大きく改訂され、小学校第3学年から高校卒業までの学校体育で扱われてきた様々なボール運動系領域の種目は、ゴール型、ネット型、あるいは、ベースボール型の3つの型のいずれかに位置づけられた。さらに、技能の指導内容は、主として、「ボール操作の技術」及び「ボールを持たないときの動き」の観点から整理された。しかしながら、学年段階毎に設定された技能の指導内容には、明確な根拠はなく、仮説の段階であった。

本研究の目的は、小学校高学年児童に学習可能なボール運動系領域(ゴール型)の技能の指導内容を明らかにすることであった。

第1章では、2008年改訂以降の小学校学習指導要領解説体育編に例示された「ボールを持たないときの動き」に関して、児童の属性及び教師の属性に関わらず、戦術学習の要素を授業計画に位置付けることによって学習可能であることを明らかにした。

第2章では、教師の視点から、児童生徒の学年段階に対応した技能の指導内容を明らかにした。その結果、中学年に例示された攻撃時のボールを持たないときの動き、高学年に例示されたドリブル、攻撃時のボールを持たないときの動き、及びシュートに関する技能が、高学年児童に適切な指導内容であることを明らかにした。

第3章では、児童の観点から、高学年児童に適切な技能の指導内容を明らかにした。その結果、高学年児童は、高学年に例示された、ドリブル、攻撃時のボールを持たない動き、及び中学で例示された守備に関する技能が、高学年児童に適切な指導内容であることを明らかにした。また、ゴール型の陣取り型において学習可能なグループ戦術は、「クロス」及び「飛ばしパス」であることを明らかにした。

そして、教師の観点、及び児童の観点から、高学年児童に適切な技能の指導内容を提案した。さらに、高学年児童に適切な技能の指導内容を明らかにするために、教師調査による観点、児童調査による観点、及び単元配当時間の観点から調査することが必要であることを示唆した。

本研究の意義は、第一に、高学年児童に適切な技能の指導内容を、教師の観点及び児童の観点から明らかにしたことにある。第二に、高学年児童に適切な技能の指導内容を明らかにした際の方法論にある。教師調査による観点及び児童調査による観点の2つの観点から検討するという方法論を用いれば、対象となる技能の指導内容が異なっても、児童の発達段階に適合した技能の指導内容を明らかにすることが可能となる。つまり、本研究は、カリキュラムを検討する上でベースとなる研究であると考えられる。